63歳のMさん。病気らしい病気をしなかったのが自慢だった。定年後も再雇用されて働き続けた。小規模だった自動車部品メーカーを中堅企業に発展させたのは、もちろん自分一人ではないが、工業高校卒業後コツコツ技量を磨きつつ、若い連中を指導してきた賜物という自負があった。誠実な人柄も社長のほか多くの仲間の信頼を得ていた。

初冬の風がひときわ冷たく感じるある日の午後、幅広の帽子をかぶり大きなマスクをして長年住み慣れた家があった場所に来た。働き続けて建てた自慢のマイホームは取り壊され、ロープが張られて更地になっていた。

まさか娘が依存に 年甲斐もなく涙が

Mさんから一人娘で20代のI子さんのパチンコ依存について相談を受けた。まだ自宅を手放すことは考えてもいない時期だった。駅前のこじんまりした喫茶店の隅で会った。これからどうするか、という話に持っていきたかったが、Mさんからは後悔の言葉だけが出続けた。

パチンコ依存 第2回

新「相談現場からの報告」

柏木勇一
産業カウンセラー・家族相談士

「もう遅いんです。なにもかも」 一人娘は母親の介護に疲れ果て

まさかあのしっかりものの娘がパチンコ依存症になろうとは…Mさんには合点がいかなかった。まさか、まさかという思いが、異常に気づくことができなかった最大の理由だろうか。I子さんの行為にはもちろん問題があったろう。しかし、一人娘が不憫でならなかった。こっそり年甲斐もなく泣くだけ泣き、涙も出尽くしたという。ただ自分を恥じた。いまさら後悔しても始まらないが、仕事優先で家庭を省みなかった自分を責めた。話し合いの最後に「あなたは何も間違っていないと思いますよ。家族のために働き続け、奥さんも娘さんも感謝こそすれ、恨んでなんかいません。さあ顔を上げてください」とMさんに語り、いつか早いうちにI子さんと会わせてほしいというお願いをしてその場は別れた。パチンコにはまってしまった当人の話を聞かなければ何事も始まらない。

妻が若年性認知症に 家出した娘を呼び戻し

このMさんとの初回の面談では、家庭内の出来事の経緯を聞くことに専念した。それによると、同年

齢の妻の様子に変化を感じたのはまだ50代だった。物忘れがひどく、何度も同じことを繰り返して話すことが多くなった。「もうボケたのか」と軽口をたたいていたが、半年後、1年後と、次第に様子がおかしくなった。I子さんも「こんな年でボケるわけないよ。母さんは大丈夫」と言ってくれた。直後にI子さんは一人暮らしを始めた。

2年、3年と、気になることは続いた。Mさんが家にいる日曜日、スーパーに買い物に行っても、何を買うのか忘れてしまって戻ってきた。念のため、妻と一緒にスーパーに行った時のことだった。妻の買い物ケースになかなか商品が入らない。聞いてみると「今夜何を作ろうとして買い物に来たのか忘れてしまった」という。やっと買い物をしてもお釣りをもらうことを忘れて帰ってくる日もあった。買った商品を詰めた袋を忘れることも。

これは普通ではないと思い、かかりつけの内科医の紹介で診察を受けた大学病院で言い渡されたのは「若年性認知症の初期症状の疑い」だった。この病気の怖さをあまり知らないまま、Mさんは日常の妻の世話をしてほしくて、勤務先の運送会社近くのアパートを借りていたI子さんに事情を話して家に帰ってもらった。

Mさんの会社も2年前から定年前に辞めれば退職金が割り増しされる制度があることは分かっていたが、仕事人間のMさんにはそういう選択肢はなかった。娘と一緒なら、妻も安心するだろうとも思った。事実、夫の真意は分からないまま、妻は長女の帰宅を歓迎した。もともと若い娘の一人暮らしには最初から反対していた。

ちょっと遠くなるが、通勤できない距離ではないということで、I子さんも同居を受け入れた。母親の様子が心配なこと、経済的にも一人暮らしが高くつくことが決断を後押しした。自分の自由な時間が無くなることの不安はあった。

どうすれば返せるか それを教えてほしい

I子さんの仕事は専門学校で学んだ経理。運送会社にとっては大事な業務。父親譲りの仕事熱心で頑張り屋。数字のミスも少なく、会社にとっては貴重な存在だった。季節によっては残業もあったことも、勤務先に近い場所での一人暮らしを始めた理由だった。上司からは何度か「いい人がいるんだがつきあってみないか」という話もあったが、仕事を優先してきた。これも仕事人間の父親を見てきて自然に身についたのかもしれない。

そのI子さんとの面談は、自宅から最寄りの駅は避け、沿線では大きめの駅前のシティホテルのラウンジで続けられた。母親が落ち着いている時間帯の午後を選んだ。いつも客はいたが、テーブル間にスペースがあり安心して話し合うことができた。

「すみません。もう遅いんです。パチンコにはそんなに行っていません」というのがI子さんの第一声だった。

「何が遅いんですか」

「何もかもです」

「えっ」

「ですから、父は私のパチンコ通いを止めさせようとしているのでしょうが、もうどこにもお金がありません。借りるだけ借りまくって、返せません」

「サラ金ですか?」

「ええ、無人機って本当によくできてますね。誰にも知られないで借りられますから」

周囲の目を気にしてか、I子さんは懸命に涙をこらえている様子だった。周りで話し合っている人たちがこちらの話に耳を傾けていることはないのだが、気持ちが落ち込んでいる時はどうしても気になってしまう。そしてI子さんは…。

「実はこうして話を聞いてもらうことに同意したのも、どうすれば借金を返せるのか教えてほしかったからです。父にはまだ本当のことは話してません。経理が仕事の自分がこんな相談をするなんて、人間失格ですね。もう消えてしまいたいけれど、母を思うとそれもできないし」とゆっくりと続けた。

会社の男性に誘われて 3千円で気持ちが軽く

I子さんは、母親の介護に疲れ、それを癒す場所をパチンコに求めたのだったが、全く経験がなかったわけではなかった。

勤務先の運送会社は男性の職場。女性社員は、繁忙期にはパート女性を雇う時もあったが、経理のI子さんを含めて事務担当の3人。

I子さんを除く2人は年配の既婚者で、毎日定時で帰社していた。運送会社は顧客に合わせた業務で、必ずしも勤務時間が一定ではなかった。運転手仲間の多くは、時間が空いた時にパチンコに通っていた。ほんの時間つぶしで、会社も大目に見ていた。リラックスしていれば事故も防げるので、気分転換が必要ということでもあった。

仕事が一段落したある日の午後、I子さんは「どうだい、たまにはちょっと遊んでみないか。疲れも忘れるよ」と誘われた。もちろんためらいがあった。「だって昼から女性が行くところではないでしょう」と断った。すると「何を言ってるんだ。行ってみればわかる」という言葉が返ってきた。どうせ30分で帰ってくるから、という言葉に押されるように歩いて10分ほどの店に向かった。なるほど、年配の女性の姿が少なくなかった。

見よう見まねで恐る恐る台に向かった。千円だけと決めていた。思いがけず粘ることができた。30分をつぶすには3千円出費した。あらかじめ決めた金額を使い果たした一人がI子さんの後ろに立っていた。「やるじゃないか」と声をかけた。「才能があるかな」とも笑いながら話した。I子さんも笑顔を返した。事務的な話ばかりで窮屈な職場では味わえないひとときだった。3千円はちょっと痛い出費だったが、気持ちが軽くなったことがうれしかった。その後

も週1回だけ、金額も限定して楽しんだ。何だか仕事の負担が軽くなっていく感じがした。

夜中でも物を探し寝てはくれない母

I子さんが家に戻ってからも、実は母の症状は進行していった。認知症の進行を遅らせる投薬治療は続けていたが、物忘れはもちろん、同じことを繰り返す、時間の観念がないことは何も改善されていなかった。10年前のことと昨日のことが混濁していた。若年性は一気に進行します、と医者は残念な言葉を発した。いずれは日常的な家族の介護が必要になります。安らげる場所は家族と一緒が一番ですから、とも。

結局、母を介護するためにはI子さんは会社を辞めざるをえなかった。「何とか施設を探すから」と父親も懇願してきた。自分の今後を考えるためにも少し休みが欲しいと思っていたので、受け入れた。

I子さんが一番困ったのは、母親の四六時中の物探しだった。眼鏡やティッシュ、歯ブラシなどの日用品はちゃんと置く場所を決めていたにもかかわらず、ない、ないと言って探し回った。夜がひどかった。I子さんは、母と寝室の隣りの部屋で寝ていたが、深夜になって室内を歩き回る母に気づいた。「もう遅いんだから」と言っても効果はなかった。父親も起きてきていったんは寝かせようとするが、母親の瞳は異常に輝いていて激しく抵抗した。

次第に物音が高くなる夜が多くなった。引き出しを全部あけて何か探していた。声をかけると「貯金通帳がなくなった。年賀状をどこにしまったか」という返事。もちろん母の寝室には最初からなかった物ばかりだった。

母を否定する自分のその苦しさから逃れ

医師は「軽症ですが夜間せん妄の症状が出たようです。珍しくはありません。薬を出します」と説明してくれた。I子さん自身睡眠不足になった。憂鬱な毎日に耐えられなくなった。母は日中は比較的落ち着いていたので、買い物の途中で思いついたのがパチンコだった。会社勤務時代に味わったあの爽快感を思い出した。30分ぐらいなら、と駅前の店に通い始めた。ここでも女性の姿が目立った。一時的には気分が安定した。

しかし、介護疲れが進む一方でパチンコに通う回数が増えた。1日5千円が1万円になり、3万円出費するまで止めない日も出てきた。

会社勤めの時は娯楽の時間だった。しかし、寝不足から憂鬱状態になって入っていったパチンコの世界は、楽しみでもなければ気分転換にもほど遠かった。

I子さんがポツリともらした。「周囲から見れば依存症でしょう。でも自分はそんな感覚はなかったと言えます」

そしてつけ加えた。「母を否定する自分がいました。何度も自分を責めました。でも直りません。その苦しさから逃げるためにパチンコ台に向かいました。家にいる母のことはいつも案じていました。だから絶対に夕飯の仕度までには帰りました」

この言葉からは自制心があったと解釈できるが、I子さんが結婚のために大切にしていた貯金もあっという間になくなった。そして駆け込んだのは消費者金融の無人機の窓口だった。

借金地獄、娘はうつに父は退職、転居を決意

相談を受けた時点で5社から合計400万円。わずか2年間、月平均15回通い続けた代償だった。

もう貸してくれる金融会社もなく、I子さんにはパチンコにしがみつく気力もなかった。そして多額の借金という現実に直面して身動きがとれなくなっていた。パチンコにのめりこんでしまったことは父親にばれてしまったが、借金のことだけは話せなかった。

面談では、この事実は父親には隠し通せないこと、むしろ正直に話すことを勧めた。

娘の多額借金を聞いたMさんの衝撃はあまりにも大きすぎた。パチンコ依存から脱却してほしいという願いで済む話ではない。Mさんは父親としての責任を感じた。

まだ自分の貯金で整理することができる金額だったので、すぐに行動に移し全額を払った。I子さんは「死んでお詫びする」と土下座した。精神科に通院し、抗うつ剤による治療が始まった。無感動状態のI子さんは自宅にこもりがちになった。妻の状態も相変わらずで、Mさんも会社を辞め買い物はもちろん、I子さんが回復するまで、家事もやらざるをえなかった。

家族3人、近所との付き合いから遠ざかっていった。年齢を考えればなかなか踏ん切りがつかなかったが、転居を決断した。娘はまだ20代。結婚だってできる。そのためにも新しい環境が必要と考えた。自宅から百kmほど離れた海辺の町を選んだ。田舎暮らしを呼びかけている町だった。仲介した不動産業者から支払われた金額は、老後の生活をするには十分な額だった。

更地になった自宅跡を見たMさんから「一息つきましたから」という連絡を受け、その住み慣れた町で会い、紆余曲折があった歳月を振り返った。I子さんの症状は次第に改善され、妻については施設の入居も考えているという。

「それにしても」とMさんは、I子さんのパチンコだけは、まだ納得できない様子だった。癒しの時間を求めた場所でもあり、苦しみからの解放でもあり、呆然とした時間でもあった、と語ることができても、「本当のところは誰にも分析できない闇の中の世界なんですね」と結論にもならないことで納得しながら別れた。

柏木勇一（かしわぎ ゆういち）

大学卒業後、会社勤務を経て、現在はEAP企業（Employee Assistance Program）でカウンセラー及び研修講師として活動。
厚労省認定産業カウンセラー、キャリア・コンサルタント、家族相談士、交流分析士